FD 活動

・FD フォーラム・FD 講演会
　　FD ワークショップ　・・・1

・授業改善への取り組み
　　授業改善のための他教育機関への視察　・・・7

・社会で求められる力に関する評価指標の検討　・・・10

FD ワークショップ

担当　後藤勝正、三好哲也、後藤寛司

【概要】

本補助事業全体において，様々な教育プロジェクトや授業改善に取り組み，学生の総合的な学士力向上を目指している．その中で，組織的な FD 活動の一環として、教員の資質すなわち教育・研究指導能力の向上のための意識改革と FD 活動の推進を補助事業の一つに位置付けている．組織的なＦＤ活動において，事業の取組の成果発表を行い教員間で共有することと外部講師による「組織的ＦＤのあり方」や「教育方法」についての講演を行うことによって，高等教育に対する意識や方法の改善を図ることを実施することになっている．本ＦＤワークショップは，外部講師を招聘し，TBL（Team Based Learning）についての講演と演習により，学生主体の教育方法について見識を深めるとともに，教育努力の必要性についての認識を深めた．

【事業内容（平成 22 年 4 月から平成 23 年 3 月)】

１．実施概要

日　時：平成 22 年 9 月 7 日（火）14:00～17:00

場　所：豊橋創造大学　A23 教室

講　師：立川明先生（高知大学総合教育センター・大学教育創造部門）

テーマ：「学生が勉強を始めるチーム基盤学習で授業の効率をアップしよう」

内　容：学習指導方法の探求に関する講演を含めたワークショップ

時　　間	内　　容
14:00　ミニレクチャー（１）	現在の学生像分析 なぜアクティブラーニングが必要か アクティブラーニングの実施例
14:20　チーム造り（TBL ワークショップ）	グループの作り方
14:50　TBL の手順（１）	個別準備確認試験（IRAT）
15:00　TBL の手順（２）	グループ準備確認試験（GRAT）
15:20　TBL の手順（３）	アピールについて
15:25　ミニレクチャー（２）	TBL における良問とは？
15:30　TBL の手順（４）	応用課題（問題作成） 相互評価
16:00　ミニレクチャー（３）	ピア・フィードバックについて
16:10　まとめ	TBL と課題探求型学習の比較
16:20　終了	アンケート記入

２．実施結果と評価

他の行事や実習との日程の重複もあったが，参加率も比較的高く，ＦＤ活動への理解と教育改善への共有化が進んだと評価できる．FD ワークショップ後のアンケート（項目３参照）によると研修の成果（教育方法向上や改善意欲の向上）については非常に高い割合（93%以上）で評価されていた．また，自由記述の「すぐに使ってみたいと感じたこと（アクションプラン）」にも多くの記述がなされ，具体的な講演会（ワークショップ）に対して評価が高いことが伺える．

参加者：31 名（情報ビジネス 10 名、理学療法学科 10 名、看護学科 3 名、短大 4 名、事務 1 名）

3．FD アンケート　集計結果（回収 29 名）

1）参加者ご自身について

（1）所属先

保健医療学部 11 人（理学 6 人、看護 3 人、不明 2 人）

情報ビジネス学部 12 人、キャリプラ 4 人、幼教 1 人、図書館 1 人

（2）職種

教員 28 人、職員 1 人

（3）現在のあなたにとってレベルアップが必要なスキル・知識はなんですか

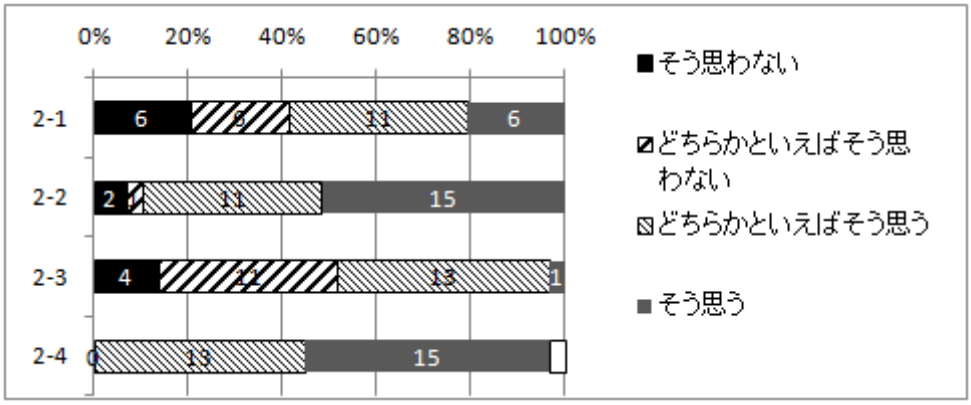
・FD すべて
・PBL
・授業目標をより適確に達成させるための技術
・教育技法（90 分の授業の進め方、学生の集中力をいかにするか）
・ファシリテーションの方法
・ティーチングスキル
・学生を「その気」にさせるスキル
・学生の指導
・学生の特性を理解すること
・学習障害・発達障害を持つ学生への対応に関する知識
・キャリア教育について
・学生自信による修学意欲の向上、学習時間の担保をさせるための方策
・簡単で分かりやすい問題を作り上げること
・授業の運営手法
・教育力
・情報リテラシを利用者にわかりやすく伝えるスキル

★Q2 以下の回答

（4.そう思う　3.どちらかといえばそう思う　2.どちらかといえばそう思わない　1.そう思わない）

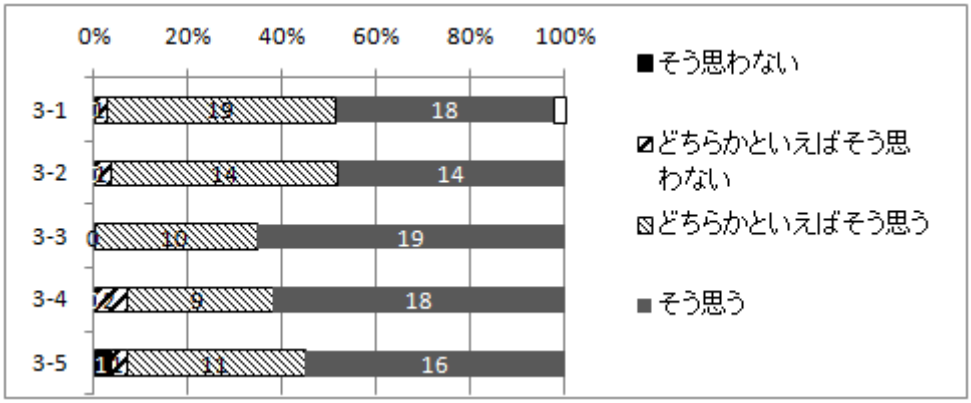
2）研修参加への経緯について

1　研修目的についてある程度知った上で参加した
2　自分自身で能力開発の必要性を感じて参加した
3　研修内容をすぐに活用しなければならない状況で参加した
4　上司はこの研修の参加を肯定的に捉えている



3）研修プログラムの設計について

1　研修目的は明確に設定されていた
2　研修は自分の業務に生かせる内容だった
3　研修は分かりやすい順序ですすめられた
4　研修内容は丁度良いレベルに設定されていた
5　研修時間は研修目的を達成するために丁度良い長さだった

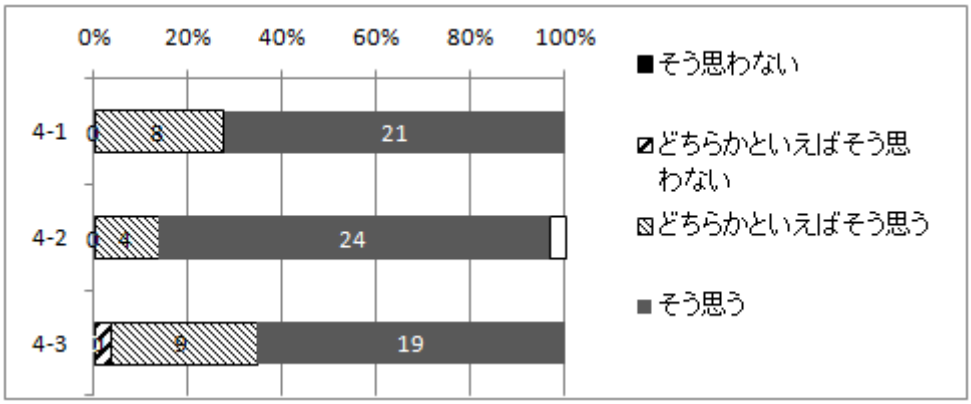


4）研修スタッフについて

1　講師の言動は学習意欲を高めた

2　講師は研修に必要な知識を十分に持っていた

3　講師の用意した教材はわかりやすかった



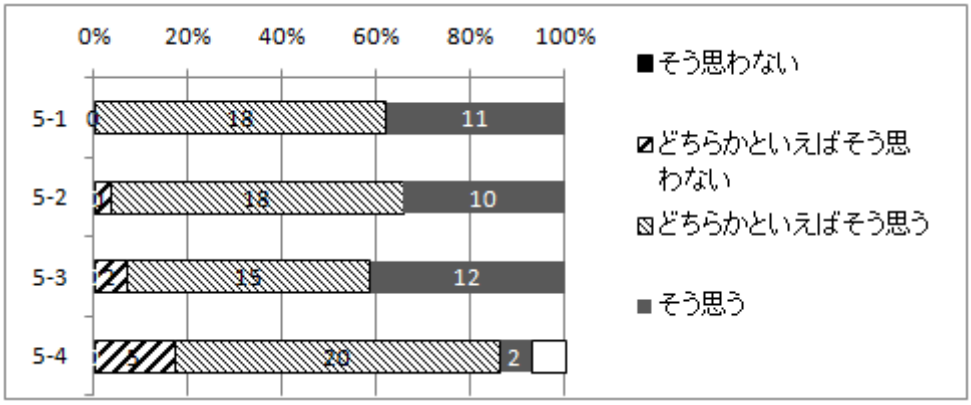
5）研修成果について

1　自分に必要な知識やスキルを身につけることができた

2　受講したことによって業務の取り組みが改善されると思う

3　研修の内容は十分に理解できた

4　新たに人的なつながりを作ることができた

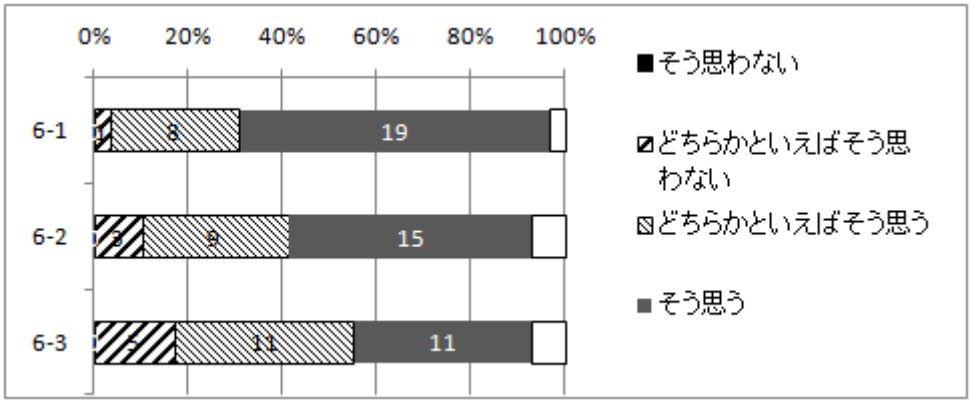


6）研修全体について

1　研修は全体的に満足できるものだった

2　今後もこの研修を継続していくべきだと思う

3　関連する研修を受けてみたい



（受講してよかったと思われる点）

・TBL の内容が少し分かった
・発達障害に対応できるとすれば受講してよかった
・IRAT、GRAT の実際に体験する事ができ、わかりやすかった
・グループワークの方法を考える機会になった
・体験型の研修であった点がよかった
・講義の進め方全体像が把握できた
・TBL というものを理解することができた。体験出来たのはよかった（ワークショップがあってよかった）
・TBL を体験できた点
・グループワークの方法を、今まであまり分からずに行っていたが今回少しわかった
・TBL についての概略がわかった
・IRAT と GRAT の手法を知ったこと
・TBL の内容
・自分が、チームあるいはグループの活動プロセスに、ファシリテーターとして介入する役割
・新しい取り組み方を知り事ができた。知識を増加させる方法を知ることが出来た
・TBL を実際に取り入れる際の注意点、進め方
・学生が主体的に学習する手法にも、TBL・PBL のような異なるものがあるということがわかった。
・IRAT、GRAT を具体的に体験し、学生と同じ立場で考える経験が出来たこと
・これまでは、グループ学習にはあまり興味がなかったが、自分の授業にも導入できそうな部分があり、TBL をやってみたいと思った
・消極的な学生を、授業の中に引き込む方法として活用できる
・チームでの学習を体験出来る点
・TBL について理解することができた
・学生が学習する力がつくと思った
・一職員として教員の授業手法を知ることができた

（研修をよりよいものとするために改善すべ点）

・講師の先生が自ら体験できた？？を具体的に話していただきたい
・本日の参加人数がちょうどいいのではないかと思う

・チーム・ビルディングをもっと知りたい
・時間的配慮
・もう少し研修時間は長くしてよいように感じた
・特になし。もう少し長い時間でもいいと思った
・やる気のない学生ばかりが集まったグループに対して、教員はどう動けばいいか
・問題作成の前、テキスト。を読む時間がもう少し長く欲しかったです
・先生のご発言の IRAT・GRAT　PBL の言葉がすぐにのみこめず、理解するのに大変でした

（研修ですぐに使ってみたいと感じたこと（アクションプラン））
・グループでのディスカッションはすぐにでも可能と思います
・答えの色別カード
・授業に導入してみたいと思います
・IRAT、GRAT を試してみたい
・グループ分けの方法
・IRAT と GRAT
・TBL 全体の仕組み
・GRAT で体験したものを、自分なりにアレンジしてやってみたいと思う
・使って見たいと思いますが、具体的にすぐ浮かびません。情報リテラシの講義ではすぐ活用できそうです
・付箋を用いること
・小テストでのスクラッチの活用
・講義の授業でやってみようと思いますが、準備に時間がかかりそうです。

授業改善のための他教育機関への視察

担当　見目喜重

【概　要】

より教育効果の高いリメディアル教育の実践方法を検討するために、平成 22 年度はリメディアル教育学会全国大会、シンポジウム「大学のアクティブラーニング」（河合塾）および FD フォーラム（大学コンソーシアム京都）に参加した。これらに参加することで、リメディアル教育、ならびにアクティブラーニングを主体とした授業の実践方法に関する各大学の取り組みについて情報を得ることができた。

【事業内容（平成 22 年 4 月から平成 23 年 3 月）】

１．教育機関等の視察状況

・8 月 30 日-31 日　日本リメディアル教育学会第 6 回全国大会
・1 月 8 日　シンポジウム「大学のアクティブラーニング」・東京会場（主催：河合塾）
・1 月 10 日　シンポジウム「大学のアクティブラーニング」・大阪会場（主催：河合塾）
・3 月 5 日-6 日　第 16 回 FD フォーラム（主催：大学コンソーシアム京都）

２．教育機関等の視察内容

学生の基礎学力向上のためのリメディアル教育の実施方法、ならびに時間外学習支援体制のあり方を検討するために、これまでに金沢工業大学、千歳科学技術大学をはじめ、教育改善・学習支援に積極的に取り組んでいる大学を教職員数名で視察してきた。

平成 22 年度は、リメディアル教育のより効果的な実践方法を検討するために、またアクティブラーニングを取り入れたより教育効果の高い授業の実践方法を検討するために、上記の学会、シンポジウムおよびフォーラムに参加した。

2.1　日本リメディアル教育学会全国大会

日本リメディアル教育学会全国大会には教員 1 名が参加した。

メインシンポジウム「高大接続問題と学士力を保障する大学教育」では、高大接続テストについて、社会全体で入学前に普遍的な学力を持っていることを見る必要があるとの論点から、その導入の必要性が議論された。

一般研究発表では、初年時教育、理数系教育（基礎数学のリメディアル教育）、英語教育、高大接続・入学前教育、e ラーニングを活用した効果的なリメディアル教育の実践、ならびに学習支援をテーマに各セッションで研究発表・報告があった。

基礎数学のリメディアル教育のセッションでは、本学の取り組みの参考となるような有益な情報を得ることができた。

拓殖大学（工学部）では、8 年前からプレースメントテストを実施しており、低得点者には数学基礎講座への登録を呼びかけ、学習支援センターを利用させているなど、本学の取り組みと共通点が多い。

山梨大学（工学部）からは、学生の学習交流の場：共創学習支援室（フィロス）の設置プロジェクトの報告があった。このフィロスは、学科・学年を超えて自主的に集まった学生の学習交流の場であり、専任教員 2 名が常駐して運営されている。このプロジェクトにより、参加する学生の学習習慣に関して、質問の内容の変化、質問の質の変化、学習するという雰囲気作りに大きな効果が見られたとのことである。こうした取り組みへの参加学生を増やすには、最後は学生の口コミが重要であることが報告された。

一方で、新潟外学からは、そもそも大学で必要な数学力に関するコンセンサス自体がないという組織的なの問題の報告があった。

2.2　シンポジウム「大学のアクティブラーニング」

河合塾主催のシンポジウム「大学のアクティブラーニング」は東京・大阪の 2 会場で開催された。それぞれの会場で異なる大学の事例が紹介されたため、各会場に教員 2 名（計 4 名）が参加した。

シンポジウムでは、まず河合塾から全国の大学のアクティブラーニングへの取組状況に関する調査報告が行われた。

次に、東京会場では産業能率大学経営学部と立教大学経営学部のアクティブラーニングへの取組事例が、大阪会場では立命館大学経営学部と武蔵大学経済学部の事例が、それぞれ紹介された。

シンポジウム全体を通して、平均学習定着率からみたアクティブラーニングの教育効果の高さや、アクティブラーニングと講義を連携させるためには「学習者中心」という発想や講義だけの伝達型教育の突破が必要であり、そのために、グループ討議、グループ調査、発表会などを取り入れることが効果的であることが報告された。また、アクティブラーニングを通して、人文社会系も基礎知識の定着をもっと充実させるべきであり、それが学士課程教育の質保証につながる一方、高次のアクティブラーニングのためにも基礎知識は必要である。日常知だけのディスカッションは無意味であり、専門知を使ったディスカッションが必要で、そのための一般的アクティブラーニングも必要であるとの報告がなされた。

各大学のアクティブラーニングの具体的な取組事例では、立命館大学からはゼミナール大会が紹介された。これはグループで一つの研究テーマに取り組み、その成果を発表するものであるが、大会を通して他グループや講評講師と意見を交わすことで、様々な知識・能力の習得が期待できる。また、武蔵大学の三学部横断型ゼミ（経済学部、人文学部、社会学部）や、立教大学経営学部で取り組んでいる BLP（ビジネスリーダーシッププログラム）が紹介された。

2.3　第 16 回 FD フォーラム

大学コンソーシアム京都主催の第 16 回 FD フォーラムには教員 2 名が参加した。

シンポジウムでは、「組織的 FD の取り組み～FD 義務化から現在（いま）～」というテーマで討論が行われた。2008 年に FD が義務化されたが、その後の状況を顧みると、FD が教職員自身の問題として必ずしも取り組まれていない、また大学全体で組織的に取り組まれるべきものであるにもかかわらず、組織的に活動されている事例が非常に少ないなどの問題がある。そうした問題点について討論を進めるために、まず教員研修プログラムの実施（京都外国語大学）、授業改善のための FD のパラダイムシフトの必要性（立命館大学）、アセスメントの効用（島根大学）、FD 戦略の視点（名城大学）に関する発表があった。

その後の討論では、①FD は各個人の意識が重要であるが、しかし個人では限界があり、組織的サポートが不可欠である、②FD を継続して実践するためには専任教職員で構成する委員会組織（あるいはセンター）の設置が重要である、③授業改善には「授業とは教員と学生とともに作る学びの場である」などのパラダイムシフトが必要である、④学生も FD に参加するような仕組み作りが必要である、⑤アセスメントは組織的 FD を実現させるプロセスとして重要であるといった意見が出された。

分科会「地域連携型教育の可能性」では、島根県立大学、福島大学、佛教大学から各大学の取り組みとその問題点に関する報告があった。これら三大学の地域連携プロジェクトは、いずれも農業を主体とした取り組みである。

いずれのプロジェクトにおいても、その効果として、①学生の自主性を高める上で非常に効果がある（た

だし、それを定量的に評価することは困難)、②地域との交流のみならず、学内の交流も活性化させることが報告された。

一方で、プロジェクトの運営に当たっては、①講義時間内での学外活動は不可能であり、基本的に土日、夏期休業を学外活動の時間に充てざるを得ない、②自由参加型では参加学生が限定されるが、自主的に行動しない学生まで参加させるにはその行動に責任をとる覚悟が必要である、③一方的に地域から学ぶようなプロジェクトでは継続性は得られず、地域への貢献を通して地域（協働企業・団体）からの信頼を得ることが必要である、④継続しないプロジェクトは地域からの信頼を失うだけである（やらない方がよい)、⑤プロジェクトの継続のためには人をどのように継続するのかが大きな問題である、⑥学生を自主的に動かすためには、まずは教員が動くことが重要であるなどが問題点・課題として指摘された。

【事業実施に対する評価】

今年度も上述のように学会、シンポジウムおよびフォーラムに参加したことで、リメディアル教育およびアクティブラーニングを主体とした授業の実践方法に関する各大学の取組について情報を得ることができた。特に、アクティブラーニングの実践に関して得た具体的な情報は、次年度からの講義および学習支援体制の改善策の検討に大いに役立つものである。

社会人基礎力に関する評価指標の検討

担当　加藤尚子

【概　要】

今回の事業では、本学教育プログラムにおける「汎用的技能」「態度・志向性」の強化について、その評価指標の開発に取り組むことが目的の一つに挙げられている。本学では汎用的技能の中でも特に社会人の基礎的な力にかかわる「コミュニケーション力」「発表力」「意見形成力」に重点を置いている。昨年度は、汎用的技能についてはこの３つの力について検討を行うとともに、態度・志向性についてはチームへの貢献度という観点から検討を行った。本年度は、昨年度検討した評価指標をいくつかの授業で学生に対し実施した。

【事業内容（平成 22 年 4 月から平成 23 年 3 月）】

本学では汎用的技能の中でも特に社会人の基礎的な力にかかわる「コミュニケーション力」「発表力」「意見形成力」に重点を置いている。汎用的技能についてはこの３つの力について評価できるようにした本学が求めるコミュニケーション力とは、①自分自身が情報の受け手に対して送るべき情報があり、②情報の受け手に対してきちんと情報を伝えることができ、そして③情報の受け手となった場合、情報の送り手から発信された情報をきちんと聴くことができること、と言いかえることができる。汎用的技能については、この３点から評価指標に関する検討を行った。

検討した結果、学生自身が「コミュニケーション力」「発表力」「意見形成力」について評価できるよう、評価シートを作成した。本年度はこの評価シートを複数の授業で使用した。評価シートの目的は学生自身が「コミュニケーション力」「発表力」「意見形成力」について振り返ることができることにあった。他の学生との比較に加え、学生自身が自分の成長がわかるよう、自己との比較を行うことが目的であった。

態度・志向性については、自己管理力，チームワーク，倫理観，社会的責任等が例として挙げられるが、その中でもチームで働く力という観点から評価できるようにした。社会で求められる力の一つにチームで働く力がある。社会に出ると、学生時代とは異なり、さまざまなメンバーとチームを組み、仕事を遂行していくことが求められる。チームへ貢献するには、チームワークだけではなく、それぞれのチームメンバーとともに課題を遂行するために、個々人の自己管理力や倫理観、社会的責任が求められることとなる。よって、態度志向性については、チームへの貢献度の観点から評価できるよう、評価シートを作成した。またこの評価シートはチームへの貢献度の観点から作成されているため、チームでディスカッションを行う授業へ導入した。

【事業実施に対する評価】

複数の授業に評価シートを導入したところ、ゼミナール（２年）では意見形成力が弱い学生は適切なレポート作成を行うことができておらず、レポート内容と意見形成力に関する項目との関連性が示唆された。態度志向性については、他者の行動を観察する機会が増えることで、他者の行動と自分の行動とを比較し、自分の行動をどう改善したらよいか考える目安ができたのではないかと考えられる。

今回は評価シートをもとに学生への指導を促すことは教員に求めなかったが、教員が評価シート内容と学生の行動とを観察し、必要に応じた指導を行うことで、「汎用的技能」「態度・志向性」の強化につながると考えられる。